

平成 29 年度東京歯科大学同窓会共催学術講演会

歯科医療の舞台裏 2017

東京歯科大学臨床検査病理学講座教授

井上 孝 先生

超高齢社会を迎え、患者は従来の健常者型の治療（歯科医院完結型）から、多くの基礎疾患を抱えた高齢者型の治療（地域完結型）に変貌を遂げようとしています。ウ蝕の治療と喪失した歯の補綴という歯の形態の回復を中心とした健常者治療から、様々な原因による口腔機能障害の回復へと変わろうとしているということです。治療の難度、リスクの増加を意味し、口腔と全身との関係が重視されるようになったことです。最近のデータでは、歯周病原菌と関節リウマチ、糖尿病、腎臓病そしてアルツハイマーとの関係が明らかになり、非アルコール性肝炎や動脈硬化、そして低体重児などの胎盤内にも歯周病原菌が見つかったと言われています。医科歯科連携の重要性が叫ばれる所以ともいえるでしょう。

翻って、従来の歯科治療が不要になったわけではありません。歯周治療を考えてみても GTR 法やエムドゲインの出現、PRP や PRF、さらに直近ではリグロスによるサイトカイン療法も注目を集めています。ただ残念なことに、これらの新規治療が有効であるというエビデンスが示されていないのも事実です。また、脂肪幹細胞を使った再生歯科医療、さらには iPS の応用にも夢は膨らみますが、その舞台裏は多くの混乱状態にあります。

今回は講演の機会を与えて頂き、健常者型の治療の舞台裏のみならず、高齢者型の歯科治療に潜む畏についてお話できればと思います。宜しく願い申し上げます。